

(4) 早く大学側は有効な方法を提示せよ。

何れ我々としてはもしも二〇日正午以後も警連合が封鎖の解除・身柄の解放をしない場合は、我々自身の手で解除の行動に出る。その際、大学当局は次のことを認めてほしい。

- (1) 電気・ガス・水道・電話を切ること。
- (2) 封鎖解除に要する物品資材を大学当局が提供すること。
- (3) 封鎖解除の行動をするに当って教室その他の使用を認め、生じる破損はやむを得ないものとして弁償を求めぬこと。

(資料) (後)

一月二〇日の「大集会」は同日一時三〇分より開催されたが、集會を運営するための六者統一指導部は、集會開始にあたり次のことを決めていた。

(4) 集會名称 「中川会館封鎖解除・教職員的身柄解放のための全学集会」

(5) 時刻・場所 一月二〇日正午、中川会館前
主 席 立命館大学―五者共闘会議

(6) 実施要項

- ① 一二時開始で予告し、一二時三〇分―一時三〇分まで司會者宣言。この時間帯の間で大学と五者の各パートから身柄拘禁を解き、封鎖を解除させる決意表明。
- ② 一時三〇分―二時、ジュブレヒコールを全体としてやる。
- ③ 「教職員的身柄を解放せよ」
- ④ 「中川会館の封鎖を解除せよ」
- ⑤ 「中にいる人は直ちに出来なさい」
- ⑥ 「警問題については正常な話し合いの場で解決しよう」
- ⑦ 「大学の自治を守ろう」
- ⑧ その後、封鎖の解除・身柄の解放を要求し中川会館に近づく。緊手で動く。
- ⑨ これに対して暴力が行使された場合。
- ⑩ 電気・ガス・水道・電話を止める。
- ⑪ 封鎖解除に要する物品資材を大学は提供し援助する。
- ⑫ 以上の行動をするに当っての教室その他の提供。
- ⑬ 封鎖解除に当っての破損は止むを得ない。
- ⑭ 以上につき、パート毎の突出行動を防ぐ目的で統一指導部を作る。

我々の決意

一、我々学委委員会は警連合の教學担当理事出席の要請をふまえた一月一四日の拡大補導會議の決定に基づき、一五日前午一時より警連合と五項目要求に対する交渉を行なうて来て、まだ継続中である。その間、一六日前午四時、理事會の交渉への出席と警連合八項目要求實現を求め、交渉を継続するために警連合責任の下に中川会館封鎖が行なわれた。我々はもとより封鎖に反対であるが封鎖の中で大学理事會の出席を求め努力を続けてきた。しかし警連合は、大学理事會の今迄の出席拒否の態度を理由に現在も理事會の誠意ある態度を望んで封鎖を続行している。

二、我々は、東大をはじめとする大学封鎖を巡る異常な事態が、これを生むに至った大学の日常的な根柢から捉え、これに対処することではいかぬ向きに解決し得ないことを痛切に教えられている。立命館大学の経験の歴史も、この基本的姿勢に立って作られて来たものであるが、この問題が警問題を通じて再び問ひ直されていると考える。今回の異常な事態に対して我々各個人の意見の違いを越えて、基本的にはこの視点からなされねばならぬと確信している。

三、我々は、封鎖を實力によって排除するのでなく、内側から解かせるために、封鎖の中に置かれていたにも関わらずその中に留まり、警連合と封鎖を続けてきたが、この苦しい封鎖の中で我々が受止めた重要なものは、①寮生の要求の根柢にある大学教學に対する鋭い改革を求める要求、即ち戦後、立命がもたらした教學理念と学生諸君が現実に受けている実態との間のズレの深刻さ、②立命教學を支える体制について一定の前進性を認めながらも現実に現われている機構への寄り掛り、大学人の主幹性・責任性の弱さ等を克服することの二点である。

四、我々は警連合との討議を深める中で受け止めたものを大学理事會へ反映させ、封鎖を内側から解かせる努力を続けたいと願って来たが、我々の力量の不十分さと大学理事會との切斷もあり、現時点では尚実現しない。寮生の求める大学教學と立命武王体制に対する二つの基本的な問いかけは、全學生が共通に求めているものであり、今後我々は各々の力の範囲で全力を尽しその実現に努めるとともに、その精神を広く教職員・學生に訴えて、共に立命の教學の前進に努力してゆきたい。

我々は補導會議の交渉への参加を求め、今後進められる交渉の中で、寮生諸君も自らの力によって封鎖を解除することを願うものである。

昭和四四年一月二〇日午前二時

署名
佐々木高明 宮地國敏 今田博之 乾昭三 西田信雄 伊藤聖二
植村省三 小野一郎 小山陽一 徳沼忠男 以上十名

この一万人集會の不徹底は、凶悪さを増す代々木スカーリニストの権力専制クレープター、理事會の全面崩壊をもたす。この過程は闘争の重大な局面である。

一月二一日、全学教授會が開かれ、「事態の平和的解決」を確認した。しかしながら、各學部の五者會議では、「實力解除」が民青五者共闘派によって強硬に主張された。

一月二二日、午前四時という異例の時間に東京大学教職が開催され、席上、中川会館封鎖以来動揺しつつも一貫して事態の「平和的解決」を主張し続けて来た林屋辰三郎文學部長と石和蔵三経営學部長が、「實力封鎖解除」を唱える民青五者共闘派からつるしあげ同然の非難を浴び、林屋文學部長をはじめ文學部執行部三役と北山文學部教授、名和経営學部長、さらに天野和夫教授理事を含めて辞意を表明し、理事會内部は動揺を蒙った。

一方で、武蔵經濟學部長等統一指導部(ターゲッド)は、午後〇時、實力封鎖解除に備えて資材の購入を正当化せんがため、驚くべきデマゴギーを学内に一斉に流布させたのである。曰く「東京から日本大学の部隊七〇〇名が、二二日前午二時バスを連れて京都へ向っているというNHKのニュースがありました」と、しかもこのデマ宣伝は、同時期に京都大学においてもマイクで流されていたのである。(この日、例の「京大方式」という日共民青の武装自衛方式が実行されたのである。)そして大学当局は、後に開かれた大衆團交の席上、「ベニヤ板でキャンパスを外人部隊から防衛するために購入したものの……」などと言訳を行なったが、統一指令部が實力解除の方針であったことは確かである。

動向を深める大学執行部は、同日夜に拡大補導會議を開き、その混乱を「實力解除」で一敷させることができた。警連合の理事會団交開閉通告のタイム・リミット直前に理事會の大衆團交参加(二三日午後〇時半)を決定した。これに対して、實力解除の「お返し」を得るために教員のような努力を重ねてきた代々木民青は、自らの主張がうけ入れられないとみるや、全関西の規模の動員によって實力行動に出た。この間のク